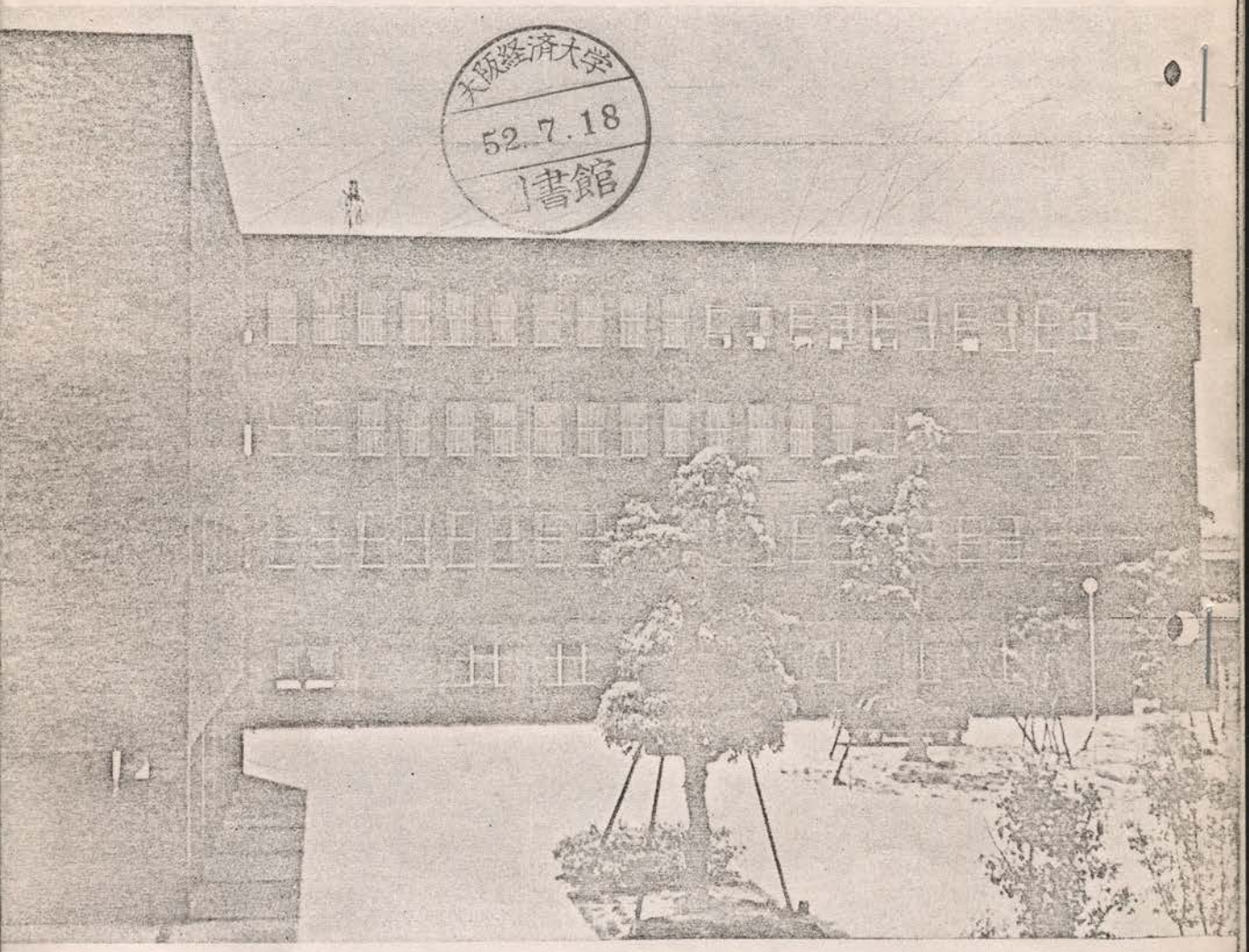
NO1.

澱江

昭和40年7月



大阪経済大学
52.7.18
図書館

大阪経済大学同窓会

刊行に当って

渡辺達好

母校大阪経済大学がここ瑞光ケ原に草創の時をえたのは、遠く一九三二年にさかのぼる。爾来、春風秋雨星霜を重ねること三十余年、この間、いくたの曲折多難の時はあったにせよ、俊秀を輩出することすでに九千余、日夜研学にいそしむ在学生はその数七千をこえようとしている。今や母校がわがくに社会の各界において、一大勢力となりつつあることは、まことに頼母しく、こころ強い極みである。

若き日を学園創造の苦難に耐え、ひたすらに母校の将来を案じつつ、あの疾風怒濤のなかを巣立っていった初期の卒業生には、こんにちの偉容を誇る母校の姿を想像しえたであろうか。思うに私学の発展は、卒業生に待つところが大きい。年々歳々増大する卒業生の集団、同窓会こそ、母校発展の原動力であり、同窓の一人々々が、エネルギーの源泉であるといえよう。

瓢莫、古語にいう。〃一樹の蔭に宿り一河の流れを汲むもまた他生の縁〃と、それを思えば笈を負うて郷関を出で、同じ学舎に同窓の友として青春を過したわれわれの契りには、更に深くかたきものがあるであろう。

われわれは母校を巣立ってすでに年あるこんにち、なお、遠く金剛の山脈を望んで茫洋たる将来に雄飛の夢を託し、淀の流れに耳を洗って先哲の訓えに泣き、一杯の緑酒に天下国家を論じた若き日のことどもが、なつかしい思い出となって甦ってくる。

母校は、若き日を若く過した青春の故郷である。されば、われわれ同窓は一体となって、美しき青春の故郷にさんとして輝く伝統の灯をして、更に大いなる光を放たしめるよう努むべきであろう。

同窓会誌〃澱江〃は九千の同窓をひとつにむすぶきづなである。われわれは〃澱江〃を通じて旧交を温め、親睦を厚くし、常に新たな心をもって母校の発展に寄与し、併せて恩師の学恩に報いるべきであろう。（同窓会理事長）

会誌の発行によせて

学長　藤田敬三

このたび久方振りに本学同窓会誌が出されることになり、私どもにも一言ご挨拶の機会を与えられましたことは、色々な意味で喜びに堪えないところであります。

本学も既に三十才を越えて学園としても一人前の歴史を持つこととなりましたので、本誌を通じて各方面にご活躍の同窓諸氏のご動静を伺うと同時に、伝統の自由と融和のみごとな統一の下に近来その清新な潤歩を続けつつある本学の情況を広くご承知願い、全学園の力を一段と結集して、少なくとも質的にはA級の異色ある私学としてわが国の学界教育界に重きをなす存在に成長致し度いと念願しておる次第であります。

本学は先年経営学部増設の結果、その学生数は既に数千を越え、これに伴う教職員数も従来の約三倍となり、学園の年予算も数年前に数倍する約四億の規模に増大、昨年竣工の図書館、本館の他に本年は教室の大拡張、学生会館の増築により、設備の外観内容共に面目を一新することとなりました。

目下進捗中の約三万坪の新校地の購入と、来春の大学院設置の問題が完了すれば、当面残る問題は体育館改築の問題のみとなるところまで参りました。

もちろん、教学内容の積極的な刷新や第三学部の設置、研究機関の充実などの問題はなお今後数年の重要課題として存在しているわけですが、本学財政力の限界内における当面、各般の整備問題は間もなく一段落を告げる運びに至りましたことは、一万同窓諸氏の絶大なご支援と学内一致協力の賜物と理事会の諸兄共々私の日頃感激しておかないところであります。

諸兄におかれましては、ご多忙ご活動の間にも、ご寸暇をさいて本学に御立寄り下され、何かと倍旧のご声援を賜わらんことを心から御願いする次第であります。

一言本学の近況を御伝えしてご挨拶にかえます。

第十三回卒業　中村美智子

みなさん、お久しう、お元気ですか。私は毎年の同期会にはつとめて出席、そのたび卒業いらい初めてネという珍らしい方々とも一番たくさん会っているとも思います。

そして、そのつどなつかしさいっぱいの感激を味わうのですが、そのあとたちまち握手を交わした友はなく、子供と主人の良妻賢母ばかりになってしまって、友よ、久しぶりに歓談しようと探しもとめねばならない。そこにいるのは教育ママや主人の影ばかり、昔の友はいない。がっかりしてしまう。

もうこんどはいきたくない、そんな淋しい気持、お願い!! 同期会にはみんなの友としてでてきて頂戴、そして一年に二度じゃない、子供や亭主を気にするな、はめをはずして、美徳をこきおろし、悪徳のはなしに花を咲かせようではないか。

◉電話局番の変更

母校の電話局番が次の通り変りました。

大阪　三二八局　二四三一番（代表）

御挨拶

理事長　田岡嘉寿彦

同窓会は逐年会員を増加し、現在では総数九千八百名にのぼり、会員各位は日本の産業、教育、行政の各分野に於いてわが国の発展、興隆の中堅として活躍しておられることは誠に慶賀に堪えない次第であります。

次に大学の方でありますが昨年経営学部が増設せられ、昼夜間共に経済学部と経営学部との二学部制度となり、本年三月の入学志願者の如きはその総数一万名を越える盛況を見た次第であります。

学部の増設と共に図書館と本館の新築、殊に、図書館は最も近代的な様式、設備は近畿諸大学中誇るに足るものがあります。その建築請負業者である株式会社竹中工務店が先般大阪府建築コンクリートで大阪府知事から優秀な建築物として表彰せられたものであります。これ等の建築に対し同窓会から多額の寄附金をいただいたことに対し茲に厚く御礼を申上げます。なお、昨年は同窓会と大学との共同になる黒正先生の胸像が完成し、美事なものを校庭に建てることが出来たことも御同慶に堪えない次第であります。

ただ、これ等の事業に多大の御尽力を賜った前理事長西沢喜洋芽先生がその完成を見ずに亡くなられたことは誠に残念の至りで、ここに感謝の意を表すると共に御冥福を御祈りする次第であります。

本年に入ってからは近畿圏整備法の関係もあって教室一棟、延坪数千四百坪、学生会館延坪数約千百坪の新築にかかっております。なお、昭和四十一年度開設を目ざして大学院設置の準備をすすめており、また、現在の校地は極めて狭隘で大学設置基準の要求する三分の一しかない上、前掲近畿圏整備法の関係から大阪市内での教室の新築は法律上殆んど許されなくなるので今のうちに適当な学校用地を買って置くことが本学発展の為の絶対的要請でありますので目下その物色中であります。

色々なことを考えて見ますと学園の前途は多事、多難であります。この際同窓会の皆様に一層の御支援を賜り度く御願い申上げる次第であります。

黒正先生胸像除幕式

田岡雁来紅

美しき台座の上にほほえみて黒正博士あらわれ給ひぬ
若き日の燃ゆる情熱かたむけて君が創りし大阪経済大学
大淀の葦ゆ吹き来る風の音聞きつつ永久にほほえみ給ふ
星移り年変りつつ学園の栄ゆくさまを見まもり給へ
永久に栄え国を護らむ学術の殿堂高く大淀の辺に

第三回卒業　福井尚吾

学窓を出て早や二十八年、古人の歎きを泌々と感じる年令に突入しました。曰く、青年老易く、学成難し。茫々乎としてすぎた戦争期間、それに続く二十年、われらの世代は明治と昭和とのサンドウイッチ世代、悲劇の世代であった。

実業の学校を出て虚業に心胆をくだく現在、自分ながらものぞましいものとして定着させている。東西文明の架橋は如何になすべきか。

文化一般の問題と同時にヨーロッパ文明、就中ギリシャ文明の位置づけを追跡したいと念願しています。

母校の限りない発展を祈念しつつ、自己の回顧と展望を記しました。

（徳島大学助教授）

第九回卒業　佐々木一義

先日久々ぶりに母校を訪れた。在学中緑化運動を展開、みんなで植えた樹が、さめるような緑を輝かせて大きく育っているのをみて実に嬉しかった。

運動場だったところに図書館や本館が建ち、故黒正生先の胸像も建立され、これが母校かと思うほど立派になっているのには驚いた。が内容、質はどうだろうかとちょっと気懸りになった。

大学は学問をするところ、学生の多いことや、建物の立派なことだけを誇ってよいものか、とも思った。が幸い、母校には黒正先生の遺された〃塾的精神〃が培れている。いわゆるマンモス大学の心配のないことだけは、はっきりと汲み取れよう。

せっかく東海道新幹線が側を走っているのだから、車中からもそれと分るよう〃大阪経済大学〃の存在を、もっとはっきりさせてほしい。同窓はもちろん、世の人たちにも親しみがもたれるように……。（広島バスセンター勤務）

第六回卒業　松井勉

校舎の増築をはじめとして、学校の施設も立派になり、学生も増えたそうである。

毎月十銭を出し合って学園の緑化資金とし、校庭に樹を一本一本植えていった頃のことが思い出される。今の若い人たちにもそんな機会があるのだろうか。

「澱江」が古い人と新らしい人の、かけ離れた世代を結ぶきづなになればよいが。

（人事院大阪地方事務所第一課長）

はがき通信

これは同窓会名簿により卒業年次ごとに無作為抽出の方法により計三〇〇名にハガキによる投稿を依頼したものです。編集の都合上他のページに掲載したのもあります。

第一回卒業　外海波吉

終戦後神戸で仕事をしていたのと第一回卒業生ということだけで、同窓会神戸支部長に指名されたものの毎日の多忙に追われ、また住所や事務所の移転などで支部のお世話もできず、申訳なき次第です。先般の支部総会で後任がきまりましたので、これからの神戸支部の活躍はご期待にそうことと思います。（自営）

第一回卒業　豊田砥

卒業後まる三十年、それがそのまま私の教壇生活の年数でありますが、現在は公立中学校長として第二国民の養成に力をつくしています。瑞光ケ原に発展の一路を辿る母校の姿をみて、草ぼうぼうのグランドに白球を追った創立当時を偲ぶ時、万感の胸に迫るのを覚えます。苦難時代より現在まで幾多後輩の指導に当って来られた藤原先生ほか数少くなった先生方に満腔の感謝と敬意を捧げたいと思います。わが学園の宝であるこれらの先生方が学園の発展とともに、今後ますますご健勝でご多幸であらんことを心からお祈り申しています（守口市立第二中学校長）

第二回卒業　尾本勝信

かってのやんちゃ太郎のわれわれ五人はなつかしい同窓の友としてときどき顔を合わせ、冷めることなき旧交に温まっています。卒業以来三十年、けわしい世の中を生き抜いてきただけで取り得です。がこの五名、私のほかに池田光雄、松本平富田義晴、山田幸太郎（旧姓長谷川信次）です（勤先　大成化工産業株式会社）

第二回卒業　木原親平

大陸（北支）に十年、戦後は昭和二十四年から広島大学に事務職員として勤めています。政経学部に恩師河野実教授がおられます。建林正喜先生は昨年広島大学から立命館大学の大校院のドクターコース教授として栄転されました。教育学部には第二回卒業の山木俊雄君がいます。同窓会からの通信はいつもなつかしく拝見、母校のすばらしい発展を心づよく、嬉しく存じています。私の家族構成は、息子二人に娘一人、もちろん愛妻が一人います（勤先　広島大学理学部地鉱教室）

第三回卒業　大多和義則

昭和二十二年二月十七日、珍らしい大雪の朝、長男康則が生まれた。戦後の混乱期である。夫婦が生きるのにやっとのところへ生まれた長男、育てる苦労は並大底ではなかった。が元気に成長してくれた。そして今春、大阪経済大学へ入学の栄冠をかちえた。父子ともに大いなる感激である。名利を忘れてひたすらに育ててきた労が報いられたのだ。ここで私は卒業を前に会社法の最後の講義の際、中村清次郎教授が「諸君これからの人生を鳴かず飛ばず平凡に過すよう努められたい。生涯を平々凡々のうちに過すことができたら、それこそ人間として最大の成功である」と述べられたことを思い出す。私が鳴かず飛ばず長男康則の成育を楽しみにしていたことが、今日の何にもかえられぬ偉大な感激をもたらしたにちがいない。今後の楽しみ、それは康則が卒業後、父子揃って同窓会総会に出席することです。さらば同窓生諸君、諸君もまた私と同じ途を歩き、栄達蓄財といったようなミミッチイ、ケチな了見を持つことなく、よし生涯を長屋の奥の二階借りに過そうとも一家だんらんの楽しい毎日を送られんことを希ってやまない次第です（刈谷市　タイガーサッシ社長）

第四回卒業　中村源

昭和十四年春に卒業した第四回卒業生の数は少なかった。それだけに親しみも大きい。母校地元の同窓メンバーはときどき集ってコンパをひらき、若き日そのままの気焔をあげています。卒業後三十年に近い歳月、またたく間に過去った感じ。でもこの長い年月をただ平々凡々のうちに過してきたことを幸福に思っています（勤先　日立金属工業大阪営業所）

第五回卒業　山田宗男

長い間とぎれていた〃澱江〃が発行されるとのこと、こんな嬉しいことはない。

私は北海道の洞爺湖と登別の温泉の中間にある「いおう」鉱山に勤務、オロフレ峠の景観と合わせて北海道の雄大な眺望随一というところです。鉱山生活は単純ですが、ガンク親父（頑固一）の異名で、愛されています。先般札幌へ出張の際、武田薬品工業の倉垣一郎君を訪ね、久々に旧交を温めることができて嬉しいことでした。母校を遠くはなれているだけに〃澱江〃を待つ気持は、ひとしおです（北海道硫黄（株）幌別鉱業所）

第五回卒業　伊吹雷乗

母校を出てから二十六年、年月の流れは早い。満洲畜産公社在勤中応召、シベリヤ経由で二十二年に復員。郷里長崎の水産高校で教員生活五年、県の教育庁に勤めること五年半、現在は県庁の農林部総合推進課で農業構造改革事業を担当している。当地では同窓生に会うことなく職業柄大阪へ出かけることもない。それだけになつかしい旧友と会って若き日の思い出話に花を咲かせたい気持でいっぱいです（勤先　長崎県農林部総合推進課）

第五回卒業　吉原清次

玄海国定公園の名勝「芥屋の大門」（ケヤのオオト）の近く「幣の松原」（ニギの―）という景勝の地に九州志摩カントリー・クラブというゴルフ場ができたが、これは私の勤める会社の経営です。高松宮、元朝香宮はじめ全国から知名の士が続々と来場、なかなか賑っています。近くにはわが国三大玄武洞の随一と称せられる「芥屋の大門」があります。九州へお出かけの節は是非お立寄りください

第六回卒業　石畠　悟

冬休みに入って明日は帰郷という前夜下宿に独り転っているやるせなさに堪えかねて天神橋筋にでた。明滅するネオンの灯に誘われてあるバーに入った。なけなしの財布をはたいて飲んだ。やっと間に合った終電車を上新庄で下車。快い気持で放歌高吟しながら下宿に向う途中、あっと思う間もあらばこそ、ドブに落込んでしまった。ドロンコになった新調のオーバ、上衣やズボンも脱ぎ、靴を引提げ、下着一枚で下宿へかけ込んだときの寒かったこと。この散財のお蔭で帰郷も数日おくれることになった。今を去る二十七、八年前の思い出のひとつです（呉市　トキワ百貨店理事長）

第六回卒業　篠塚国雄

少年易老学難成
一寸光陰不可軽

今年ほどこの句を泌々と味ったことはない。私が母校へ入学したのは昭和十一年の春、田舎から出ただけに大都会の風圧にたえかねた。病気で一年おくれて在学四年、大阪商人のド根性にふれることのできたことは今になおあたたかいことだと思っている。卒業、兵役、復員あわただしいうちに青春がすぎた。戦後の混乱期に結婚、長男が誕生した。その長男が今春母校大阪経済大学に入学した。感極って言葉なし、ほんとに嬉しいです。長男が父の私のテツを踏むことなく、よく学びよく遊んで意義深く青春を送ってくれることを祈って、冒頭の句に実感を覚えるゆえんです（勤先　長崎県松浦市西興工作所）

第七回卒業　川瀬良二

卒業後ただちにある商社の上海支店に勤務、第二外国語を頼りに張り切って上陸、が街頭への第一歩、習得した北京語とはてんで発音の違うチンブンカンブンの上海語に面食ってアリャアリャ。夜学に通って上海語もどうにか話せるようになると、夜の上海はすばらしい。危険な情緒に夢多き青春をゆだねて上海、蘇州南京と三年間の想い出は尽きない。今でも夢にメルシエ路をフレンチパークに向ってバスにゆられている風景が浮ぶことがある。戦後転職して映画会社に勤務、徒らに多忙多端で直営館関係の仕事に携りながらも映画をみる機会もない始末。同窓の諸君に比べて収入も少なく、ただ今はクサッテる真最中です。学生時代親しかった友は戦死や行方不明で消息を交わす途もなく、なんとなく過ぎて行く毎日が寂しいです（勤先　東宝株式会社）

第七回卒業　湯浅勝美

私は卒業後ただちに大阪機工に勤務、終戦の前年に応召、復員後は家庭の都合もあって郷里の益田工高の教職に就いています。大阪に出ることもなく、また同窓に会う機会もないだけに同窓会からの便りに接するたびに、旧友に逢ったようななつかしい気持が湧いてきます。梅田先生や落合君、吉岡君の顔がうかんできます。本部役員の諸兄のお骨折りに感謝しています（島根県立益田工業高校教諭）

第七回卒業　久保雄一郎

昭和十六年春卒業、直ちに兵役に服して従軍、その後満洲マライ、タイ、ビルマなどに転戦すること五年、二十一年に復員、戦災の岡山に帰った実家の復興に努力の甲斐あって漸く中小企業の一員としてがんばっている次第。岡山は黒正先生の郷里であり、同窓の友も多く、ときどき集って賑やかにやっています。最近、東南アジア各地で戦争があるようですが、われわれ日本人ももっとまとまって強力な国になり、他国に乗ぜられないように、そして再び子孫に同じまちがいを起させたくないものと思います（岡山マンネン酢合資会社）

第八回卒業　長尾　晃

私は入学するとすぐ、未経験の腕でサッカー部に入った。袖足、平土　遠藤という先輩猛者にずいぶんとしぼられた。が毎日の練習は楽しかった。そのころの部長は、のちに京都大学へ栄転された山村武雄先生だった。先生は学生時代サッカーの選手だっただけに、みずからもユニホーム姿で練習に参加されることも多かった。サッカー部には先輩後輩のチームワークもよくとれた実に和やかな伝統がある。そのころ私はゴール・キーパーだった（神戸ドッドウエル・コンパニー）

第二四回卒業　阪下俊一

私の勤める読売テレビには二十五回の神吉修身君と二十六回の岩島愃之助君がいます。私と神吉君はスポーツ課に、岩島君はCM課に勤務、私たちが担当のスポーツ番組のCMを岩島君が受持っているので、一日に一度は必ず顔を合わせることになります。仕事の打合せが終るとお茶をのみながらの雑談、その時にはいつも母校の話がでます。うまく三人が揃って早く帰れる日には割勘で同窓生コムパを開催しています。このように私たち三人の毎日は同窓会総会の縮図で仕事もたのしいです（勤先　読売テレビ・スポーツ課）

〃上新庄〃を憶う

〃かみしんじょう〃　なつかしいひびきがよみがえってくる。〃上新庄〃は在学の三年間、朝な夕な厄介になった駅の名でもある。私たちが在学したころの駅はまことにお粗末なものだった。ホームは二両連結車がやっと停車できるぐらいで、屋根も風よけもない。冬は身を切るような寒風が吹きつけるし、夏は灼けるような炎熱に照りつけられる。雨が降ればかさをさしていても全身ずぶぬれになる。駅員は上下線に一人宛、集札改札などすべて一人二役、駅前には人力車が常駐していた。学校までの片道が二十銭、雨が降ると五割増で三十銭にはねあがる。黒正先生がときどき愛乗されていた。私たちが駅からでると老車夫から「今日は校長はんきはりまっか」とたずねられることが多かった。

駅前から学校までは雑草がぼうぼう、ただ瑞光寺のあたりに新らしい民家がちらほらあったぐらい。学校の北側には京阪電鉄の建売住宅が十数戸並んでいたほか、江口橋までに建っていたのは米津先生（英語）の家だけで、全く万里の草原で軍事教練にはもって来いの演習場だった。

その余栄で教練の成績は良く、毎年冬の査閲には陸軍少将の査閲官閣下からきまって「教練の成績、頗る良好ッ」との講評をいただき、配属将校は連隊長に栄転していった。けだし陸軍の講評はきびしくどんなに良くても「概ね良好」が関の山で、「頗る良好」は破格のものだった。

学校の南側は旧村落で、かなりの在学生が下宿していた。みんな村人から可愛がられ、いろいろ面倒をみてもらっていた。ふるさと遠くはなれて遊学する者にとってはまことにこころ強く、身にしみてありがたいことだった。卒業後二十年

次号発行予告

〃瀲　江〃の次号は次の通り発行の予定です。

発行日　十二月十日
原稿締切　十一月十日

原稿は早い目に左記宛お送り下さい。

大阪市北区滝川町一八
大阪タイガー印刷株式会社内
〃瀲　江〃　編　集　室

三十年経ったこんにち、なお旧交を温め旧恩を謝している者も多いということである。

学校のすぐよこにはきれいな小川が流れていた。暑くなると飛びこんで水を浴びる者や手でメダカをすくいあげて遊ぶ同志もいた。まことにのどかな学園風景だった。

私たちが卒業して三十年近くになる。いまだ功成り名遂げずといえ、年の功は亀の甲より貴い。頭髪は白きを加え薄きを増し、人間としての貫録は十分、孫の手をひいている者さえある。思えばわれわれもずいぶんと成長した。が上新庄から母校附近、江口橋までの変ぼうも大きい。

かつての万里の草原も、今は会社、工場、住宅で埋った。上新庄の駅も改装されて立派になった。上下線の連絡には地下道ができ、駅員も十余名、駅前には往年の人力車に代って数台のタクシーが常駐している。大阪駅行と新大阪駅行の二路線のバスが走って「経大前」の停留所ができている。タクシーやトラックの往来ははげしく、数ヶ所に亘って交通信号がある。東海道新幹線もまた校舎のすぐ北を走っている。

こんにち、母校を訪ねて往時を追想すると、まことに今昔の感にたえない。ただ、今も昔も変らぬのは、上新庄駅に発着する電車が十五分毎であるだけであろう。（第三回卒業　世良錬次）

第一回卒業生の集い
同窓会ホールで

昭和十年の春に卒業してからまる三十年、職場ではそろそろ定年退職の季節を迎えようとする第一回卒業生が、一月十七日（日）に同窓会ホールに集った。卒業証書を手に校門を出てからいつのまにか三十年の歳月が流れた。まことに〃光陰矢の如し〃である。旧制専門学校から新制大学に飛躍してからの母校の発展はすばらしい。われわれは入学後二年間は仮校舎を転々とした。三年生になって、やっと工事中の本校舎に落ちついた。が卒業するころには、まだ足場が組まれたままだった。母校の外観は更に改った。周辺の変ぼうも大きい。が母校の庭に立つと、在学中の思い出が甦ってくる。その日集ったのは十一人だったが、せっかくのビールも忘れて昔話に花を咲かせ、散会したのは午後六時すぎだった（宇野善四郎記）

出席者　小野坂真、平尾稔（旧姓西田）内田真二、広田実、豊田砥、菅波久（旧姓山科）、橋本清邦、山口大蔵、宇野善四郎
ゲスト　藤原教授　中村元教授

郵便切手を送って下さい

〃瀲　江〃発行費の一助として郵便切手三〇円以上をお送りください。

⊙住所不明会員

住所不明のため戻ってくる郵便物が全会員数の約六%あります。転居の節は、早速お知らせください

支◇部◇通◇信

◇京都支部

京都支部も年々若い会員を迎え、ますます賑やかになってきました。母校に近いだけに在学生の姿を見かけることも多いです。毎年一回支部の総会を開催し、旧交を温め、老若の卒業生がたがいにその時代を語り合いなかなか愉快です。河原町や四条通を歩いていて同窓に出逢うことも多く、忽ちコンパを開く機会もしばしばです（佐々木降徳記）

◇姫路支部

姫路支部は故黒正先生を迎えて昭和二十二年一月十八日に結成、こんにちの支部会員数は二七〇名、総会は毎年一回在学生も参加して開催、出席は毎回六〇名をこえる盛会、すでに回を重ねて十八回、昭和二十六年から母校の入学試験が姫路で施行されているので、特に母校との縁が深い土地のような感じがする、この七月七日には母校から藤田学長先生を迎え、広畑海運の講堂で、「中小企業の諸問題について」の講演がありなかなかの盛会だった（永川仁一記）

◇九州支部

九州支部ができて十年になる。毎年二月に総会を開催、同窓相集って親睦を深めている。二月に開くのは、このところ福岡で母校の入学試験が行なわれるのでその機会を利用するわけ。今年は二月十九日に、ハカタ・パラダイスで開いた。母校からは大槻教授、本部からは渡辺理事長、それに西南大学教授として福岡に在住される恩師高木真助先生を迎えることができた。毎年同じころに、同じことを繰り返えしているのだが、同窓が集ってのコンパはよいものだ。なつかしい集いである。

最近同窓に異動があった。北之坊治夫君が三和銀行福岡支店次長から奈良支店長へ。土手勘次君が日産火災北九州支店長から本社へ、川村博哲君は大和ハウスの福岡支店次長から東京支社へ、名士の栄転で支部が寂しくなった。が篠塚国雄君は西興工作所社長として博多湾埋立に活躍、荒牧博之君は西日本新聞の幹部記者として編集局企画委員会を牛耳って活躍中、吉原清次君はゴルフ場の経営に懸命。みなそれぞれ母校在学中に培った底力を発揮して活躍しています（荒牧博之記）

◇和歌山相互銀行支部

和歌山相互銀行支部は職域支部で、大阪経済大学の出身者で和歌山相互銀行に勤務する者は、その住所や勤務地のいかんに拘らず、すべて支部の構成メンバーである。和歌山相互銀行の本店は和歌山市にあるが、その支店網は和歌山県下に限らず、大阪にまで広がっている。当行が発展しその営業圏が拡大するにしたがって支部会員の分布範囲も広がり、会員数も増大してくることになる。銀行の発展がそのまま母校の発展となり、母校の発展が直接に銀行の発展につながってくることになる。職場と母校とが一体となっていることは、われわれとしてまことにこころ強いことである。現在の支部会員は次の通りで、それぞれの職場において元気いっぱいで活躍しています。支部の事業としてはただ会員だけが集って親睦を厚くするだけでなく、家族ぐるみの親交も深めたいと目下計画中です（斎藤照雄記）

現在の支部会員（数字は卒業回次）

4斎藤照雄　21橋爪寛　22児玉恵宥、谷沢俊彦、藤井哲、瀬戸瑛雄（本社）21平田健　28植村一政（新宮支店）　23幸重臣　31黒田訓吉（梅田支店）　25石原信二、石川政明（天王寺支店）　25西口教良　30酒井荘治（岸和田支店）　27谷康男（高野口支店）会友　22玉木敏雄　26浅尾功（旧行員）

◇岡山支部

岡山は母校の創始者故黒正巌先生の故郷であり、また先生の眠ります墳墓の地であるだけに、同窓の先生を慕う心は大きく強く、また母校への関心も深いです。同窓の殆んどは産業界に活躍しているものの、さすがに最近の不況で多忙多端、支部総会を開催する暇もゆとりもない始末、同窓会ホールの建設資金も遂に見込額に達しなかったのは残念です（大森喜太志記）

◇丹有支部

丹波地方の会員で一〇〇名をこえ、在学生の会友を加えても一五〇名を突破する盛況、毎年一回の定期総会のほか、臨時の会合を開きます。今春も篠山、三田両地区で新入生歓迎のコムパを催しました。このほか在学生会友を中心に毎年〝軽音楽の夕〟を開催、土地の人々の協力も求めて、カレッジ・エクステンションに努めています。母校運動部の各方面への活躍がまことにこころ強く、母校のはつらつたる発展振りのシンボルのように見えます。当支部の役員は次の通りです。

支部長梶村文弥（八回）副支部長倉垣貞雄（十一回）同瀬子利昭（十九回）委員芝浩（二十一回）塩川清（二十二回）新家盛次（二十四回）学生委員坂本斎、中西彰

◇広島支部

広島支部の会員はすでに一二八名、在学生の会友を加えると一六〇名になる。毎年の総会には、県下の各地からも同窓が集り、母校からもなつかしい恩師の出席もあって、たのしい行事になっている。昨年建林先生が広島大学から立命館大学の大学院に転出され、今は河野先生が広島大学教授として、また広島地労委の公益委員として活躍されている。広島は母校の入学試験も施行されるので、遠いところにありながら、母校に近い感じもでます。

編集後記

▼忘れたころにくる、それは天災？否、〝澱江〟である。長い間とぎれさせた罪万死に当る。何しろ会員数九千八百、封筒に宛名を書くだけでも大変。集った原稿の整理、でき上った印刷を封筒に入れてトラックで郵便局に運ぶ。これを役員が手分けして日々の仕事の合間を縫っての勤労奉仕でかたづけている始末、渉らないのも当然、今後は何とかして段取りよくするつもり。▼会員数が増えて、財政が苦しくなってきた、現在の九千八百が四年後には一万六千、更に四年後には二万六千にふくれあがる。在学中の予納会費だけでは一切の事業費を賄いきれない。八ページの〝澱江〟の郵送費だけでも一〇万円かかる。ページを倍増すると郵送料も倍額の二〇万円になる。▼〝澱江〟も、思う存分のことが書ける〝落書集〟のようなものとしたい。そうなるともっともっとページ数が必要になってくる。この際、〝澱江〟発行費の一助として郵便切手を三〇円以上送っていただきたい。切にお願いします。▼財政の都合で八ページにしたため、せっかくの原稿を圧縮、割愛したのもでてきた。こんなことでは〝澱江〟もその役目を十分に果せないのでご協力ねがいます。▼次回は年末までに発行の予定、若い卒業生諸君の職場の紹介、グループの消息などの投稿を待っています（宇野善四郎記）

第三回卒業生の集い

雄琴・叡山へ一泊の旅

私たちが卒業するとすぐ支那事変が勃発、陸軍少尉の渡辺達好君を先頭にぞくぞく従軍、大東亜戦争に突入するや、その数は更に大きくなった。銃後も戦場と同じきびしさになった。

やがて戦争は終ったが、その日その日の生活に四苦八苦、同窓が集って消息を語り合う機会もゆとりもないままに、二十年の歳月がすぎた。

世の中が落ち着くとともに、われわれにもほっとする暇もできてきた。三十二年に母校に集って鞍馬山荘に一泊、三十六年には新和歌浦へ、三十八年には淡路島で一泊、旧交を温め合った。

ことしは六月十二日の午後同窓会ホールに集った。今日を楽しみに生きていたような笑顔を見せて集ってくる。下関、徳島、淡路、島根、刈谷からの顔も見える。白頭山型、滝の白糸型、光る源氏型と夫々頭に貫録を見せている。

社長、大学教授など肩書だけがいかめしいのもいる。やがて中村先生が夫人同伴でみえた。昔と変らぬ元気な姿「先生は昔と少しも変ってませんなあ」といったら「そうか、ぼくは昔からこんなにふけていたかなあ」と昔と変らぬ逆をとられた。今年も同伴組が多い、ひとしお賑やかである。

午後三時半、貸切バスに乗る。名神ハイウェイを走って、栗東から折れて新装の琵琶湖大橋を渡って雄琴温泉の〝湖泉閣〟へ。車中の賑やかなことは、まるで幼稚園の遠足さながらだった。入浴、ひとやすみ。母校から藤田学長先生を迎えて七時開宴。

藤田先生の音頭で一同の健康を祝福して乾杯、忽ち青春が甦った。在学時代の若さを取戻した。痛飲また痛飲、談笑、歌って踊るうちに隠し芸の披露、宴たけなわにして小部屋へ。更に歌う飲むの大乱宴〝相枕藉シテ東方ノ白キヲ知ラズ〟まことに盛況だった。

明けての朝、入浴のあと和やかな朝餐の宴、一時間余りをゆっくりと歓談、二年後の再会を約して貸切バスで雄琴を出発、五月雨けむる比叡を越えて京都へ。晦庵で〝そば〟をともにして京都駅前で解散。手を振り合って別れを惜しみながら三々五々と家路に向った（二宮清次記）

なお、今回の出席者は次の通り、◎印は夫人同伴。

藤田敬三先生、◎中村清次郎先生、加茂清重（淡路）、石田正徳、伊藤裕之（滋賀）、大多和義則（愛知県刈谷市）、◎小田護（下関）、◎木野伊三郎、柴野茂（島根県益田市）、◎三原英武、清水好喜代、世良錬次、辻正気、中沢薫、中元大輔、◎二宮清次、長谷川繁信、◎福井尚吾（徳島）、法貴道礼、◎満野圭蔵、山口与吾、吉田義高、渡辺達好

第六回卒業　荒牧博之

秋が深くなると、また同窓会総会があるなぁと思う。先輩、同輩、後輩がある日ある時ある所に集ってなつかしく思ったり、おしゃべりしたりして、三々五々に散って行く、あとは浅い感傷と、深い空しさだけが残る。

かって「同窓会の主体性」ということを考えてみたが、むずかしいことを思うより、一年に一日のひとときを、同窓が相集って無駄話を交わすだけでも意義がある。同窓会誌によって母校の近況や旧友の消息を知ることも楽しいことである。（西日本新聞記者）

同期生、職場グループなどの会合についてのご投稿を待っています